農業経営をめぐる情勢と地域に生きる無茶々園の現状と展望

協同のこころ

片山元治（無茶々園）

明日を担う百姓達のうめき声

何の因果か私達はこの10数年温暖化と異常気象に悩まされ続けながら生きた化石のように営々とミカン作りに精を出してきました。そして、この5、6年は安い外国の農産物に悩まされ続けてきました。

気が付いてみれば回りは、爺ちゃん，婆ちゃんばっかりで、集落や自治体の機能はマヒ寸前であります。自治体や農協は自分達の機能を維持するために合併を始めました。農家はどこと合併すればいいのでしょうか。

情報は瞬時に世界中に届き、地球の裏側まで24時間かからずに行ける時代に、自分の古里で、額に汗しながらも、ゆったりと生きていくことがこんなにまで難しいものなのでしょうか。無茶々園を始めて約30年。15年ほど前から、異常気象の影響は深刻になり、グローバル化の中で親子3人が働いて総売り上げ1000万のミカン作りができればよいのですが、それがなんとも出来ないのです。このまま過疎化が進めば、私達の町は50年以内に絶滅します。

何はともあれ、どこの国でも、生活の豊かさと引き換えに田舎が過疎化し、そして、滅亡しようとしています。「日本農業を守れ！」この言葉は自治体・農協の合併が始まった時点でもう色あせてしまいました。　この1、2年農業にとって惨めなことが一杯ありました。狂牛病の続きから無認可、期限切れ農薬の使用。不当表示・偽装表示、外国産農産物の不当混入。カドミウム・硝酸態窒素の深刻な汚染問題等々、消費者の皆様は大変驚いたようですが、これが当り前だったのです。消費者はドクを薄く食べさせられました。農家はそのドクを知らず直接使わされました。オマケニ、直接の経済打撃を受けたのは全て農家です。

どこかの新聞に、「信頼の回復のために牛に戸籍を作ったり、生産工程を開示したり農家は必死の努力」と、大きな見出しが躍っていました。冗談じゃないです、信頼を回復しなければならないのは毒を造った工業社会と農家に毒を売りつけた農協・流通業者、それを知らずに食べる人と売る人、そして、食べ物を管理する国家です。農業は馬鹿でもやれる生業だと思います。農業は馬鹿でも自力で出来る生業でなければなりません。しかしながら、実質、被害を受けたのは罪もない農家です。農家は農薬の中身がどんな毒なのかまでは知りません。ＢＳＥの骨粉など知るすべもなかった。結局、誰も責任を

取らず、牛飼いの一人損です。

外国の農産物に禁止農薬や無登録農薬の使用が問題になり、輸入ストップになりました。それまで、低価格で悩まされていた農家はカタキをとったように思いました。ここが重要なのです。多くの農家はカタキを中国や東南アジアの農家のように思っています。とんでもない誤解です。カタキは安い食べ物をほしがる消費者・儲けようとする輸入商社です。安い食い物にはともすれば、ドクがあることを知るべきです（高いものがドクはないとは限りませんが）。それにしても、この実質被害者も中国や、東南アジアの同じ農家なのです。彼らもドクとは思わず薬として使っているのです。

そのうち、無認可、期限切れ農薬の問題は、日本の農産物にも波及してきました。それらを使った農産物の極一部が出荷停止・廃棄処分になりました。危機管理能力が極端に低かった農家・農協が人身御供にさせられました。つい先日まで使っていて、倉庫の奥に残っていたものを使ったらそれは、使用禁止になっていた。そして、消費者は大騒ぎをし、知らない間に、これまた、ドクを食らわせられたのです。食べ物を大切にしない天罰といえるでしょう。これも責任がうやむやのまま終息しました。それにしても、哀れなのは農家です。都市では、氷山の一角が表に出ただけで、あれほど大騒動しているのに、今も多くの農家はドクを使わなければ農業はやっていけない仕組みになっています。一昔前は、農薬は国が安全と補償しているから使っても大丈夫、どんどん使って良いものを作りなさいと農協は自信を持って反論していました。多くの農産物が、おいしさを追求するあまり、病害虫に弱い品種を育成してきたからです。おまけに異常気象が作物にとって強力なストレスを与えております。直接使う農家への農薬の影響は消費者が食べるときと比べて1000倍以上もあるのではないでしょうか。農薬はドクらしいと感じている人も、生活をかけて生産している以上、病害虫が発生した場合使わざるを得ません。なんとも、哀れな話であります。

白砂糖が黒砂糖より、ハムやソウセージが肉より、牛乳やジュースが水より、なぜ安いのでしょうか。こんな珍奇な現象はまだまだあります。細かく言うと限りがありません。

トリサビリティーなんて、どんな網をかけても安さを追求しすぎれば、どうにでも言い訳が付く仕組みではないでしょうか。また、開示したから安全ではありません。どんな農薬が残効毒性が強いかよりも、一番は環境ホルモン作用・アレルギー作用等です。

汚染がますます深刻になる中で、都市の人が本当に安全な食べ物を安心して食べれるには、人工衛星で宇宙へ行くより難しくなってきたように思います。大ざっぱに言って、安心・安全な食べ物のほしい方は、じっくり顔の見える信頼関係を自分で作ること、自ら緑の地球のために社会的義務を果たす努力をすることだと思います。世の中、安全な食べ物をほしがる割には安心して食べられる環境のことは考えないようです。

今、田舎は、高齢化と農産物価格のグローバル化の中で、開き直っています。息子も不況の中で、なんとか都会で食っていけとる。毎年当り前になった異常気象。分けの分からぬ農薬問題。こんな百姓の収入じゃ食べていけない。農業の後を継がせずに良かった。わしらは年金を貰いながら食えるほど

作ればええ。こういう考えが日本列島に充満しています。

もうすぐ、農家は音を立てて激減します。荒れた農地もたくさん増えています。愛媛のミカン山も近いうち3分の1は減ると思います。

農業分野に経済合理主義を導入し国際競争をさせるなら、食べ物の安全を追求するには限界があります。むしろ、農業分野は国際競争では無く、国際協調をすべきでしょう。安心で安全な農作物は「世界の地域文化と家族農業」を維持する以外にありえないと思っています。「世界の家族農業と地域文化を守れ」ということです。機械や道具は近代化しても、化学肥料も農薬も使わず、何代、何十代、営々として作り継がれた農業、農産物こそ、安心して食べれる基本ではないでしょうか。そのためには、安心安全な食べ物をほしがる消費者と、苦境の中でも農業で生きようとしている若手農業者にとって、社会的責任を持った、コミュニティビジネスを組み立てることだと思います。

今まで、農林省や、農協や、農林金融公庫が信頼できませんでした。それが、少しずつあてになり出しました。農業政策の軸足を生産者から消費者に移したからです。

しかしながら、後継者のいない高齢者が圧倒的多数を占める地域で、後継者のいない高齢農家が実権を持つ農協で何が出来るのでしょうか。日本列島隅々からまじめな若手農業者達のやるせないうめき声が聞こえるような気がします。

ところで、皆さん、夕立ち・朝立ちを知ってますか。私の子供の頃はよく夕立ちに合いました。子供ながら、入道雲から始まる過激な自然現象が強烈な記憶に残っています。今の若者は夕立らしい夕立に会ったことがないのでは･･･。最近は若者達の方が精子の数が少なくなってきているそうです。朝立ちしない若者が多くなってきたのではないでしょうか。田舎におって、日々それとなく、海の生物、川の生物、畑の生物、山の生物、空の生物達を観察していますと、個体数も種類も昔と比べて比較にならないほど少なくなりました。おまけに、最近は体も小さくなってきているように思えます。そして、産卵や出産時期がどうも、狂ってきているようにも思えます。

生命の限りない多様化こそが地球進化のバロメーターと思っていましたが、生命の単純化が始まったのでしょうか。そのうち人間も佐渡の朱鷺（トキ）のように長生きしながらも滅亡という事態に直面するのではないでしょうか。私達は、地球の生き物のとしての義務を果す必要もあります。

疲弊する明浜の一次産業の現状

あれだけ盛んだった明浜の一次産業、真珠養殖は海の汚れ、貝の弱さ、ホルマリン等の影響による生産性の深刻な悪化、構造不況による価格低迷で喘いでいます。チリメン業もさっぱり取れない、砂取りの限界なので

しょうか。ミカン畑はもっとひどい、風台風による隔年結果の拡大、それ以上に価格の低迷は半端じゃない。今年の農家手取りは60～70円程度になるそうです。一昨年と比べると価格、収量共に同程度、昨年と比べ、価格は2～3割程安いが、収量が多いので同じようなもの、明らかに、ミカン農家の生活維持の限界を超えています。価格補償も過去3年間の平均の8割補償と言うことになると補償自体が生活できる価格ではありません。多くの農家は、親の年金や共済の解約で食いつないでいる状態です。しかも、若手・中堅専業農家にとって、この価格補償制度ではやっていけない。おまけに、作ったミカンは販売数量制限があって全量売らしてもらえない、と言うことで困っております。こんな価格制度は困ると言ってます。母ちゃんを働きに出し、息子も跡を継がさず、農外に職を求め、かろうじて家の体裁を保っている状況です。

平和で豊かでであった無茶々の里は先祖が築き上げた天にまで至る白い石垣の段畑に、かずらが巻き山に戻ろうとしています。今年はあちこちの山で黄色く熟れたままで収穫しない園が目立っております。価格低迷、数量制限、厳しい規格で収穫しても合わないのです。多くを望んでいるわけではありません。多くは望みません、親子3人でミカンを作って、1000万の売上があればよいのですが、夢のまた夢になってしまいました。

待ったなしの崖っぷち、後は農家が自らの手で這い上がるだけです。若手農家のほんとうの底力を出して生きるか農業を辞めるかの正念場です。

農事組合法人無茶々園とＦユニオン「天歩塾」の実践

農業基本法の改正の中味→　小土地所有制度の崩壊→　戦後日本社会を支えてきた農村基盤の終焉→

平成農村維新到来！！

無茶々園は健康で安心して食べられる食べ物の生産を通して地域作りをする運動体と位置づけております。今年で30年になります。現在、無茶々園グループは、生産者会員80名、生産面積約120ｈａのミカン園で農薬ゼロの目標を掲げながら、生産工程におけるＩＳＯ14001の運用、最近の異常気象で農薬ゼロはなかなか難しくなってきていますが、技術・交流・運動部門を担う**農事組合法人無茶々園**、運動と経済活動が同一法人内にあるとどうしても、経済効率が悪くなる為、田舎総合商社としての機能を持って事業に当たる**(有)ｅ‐有機生活四国**、新しい協同・農業経営、大規模出作り有機農業等と運動も含めて、共同農場を運営する**Fユニオン「天歩塾」**（(有）Ｆユニオン北条)、各会社の経営・経理管理ばかりでなく、農家の経営管理まで行う為の**株式会社地域法人無茶々園**、海外から研修制を受け入れる**ＮＰＯ法人「研修生招聘協会」**の5法人からなっています。私達は山と海に囲まれた段畑の里、明浜が再生していくためには、豊かな自然を十分に活用し、急峻な段畑という経済基盤としては極めて弱いが逆に考えると、景観としてはすばらしい、癒しの農業、試練の農業としての価値を伸ばし、皆で頭を突き合わせて、古里再生のため、集落全体のコミュニ

テイーユニオン（21世紀型地域運命共同体）化を考えています。21世紀は地域文化を大切に生きる事がテーマとなってくると考えます。また、現在10名以上の非農家新規就農希望者が、狩浜で生きていくことを目標に実践を積んでいます。

私達は、今が、古里再生の最後のチャンスと考えております。

基本コンセプト

「住民の住民による、住民のための山と海と段畑を結んだ故郷作り」

・普段着の故郷作り
・自然に優しい故郷作り
・弱者に優しい故郷作り
・癒しの故郷作り
・地域文化を大切にした故郷つくり
　揺りかごから墓場まで、教育、福祉・休養を中心とした故郷つくり
　世界をまたに駆けて仕事の出来る職場つくり

農業

老いも若きも、新規就農者も皆仲良くやれる集落営農の確立→集落加工事業等による仕事おこし

1　企業的農業（集団家族農業）

2002年、小泉首相は東アジアにおける相互依存関係の深化に伴い、10年以内にＦＴＡを含めた経済連帯を実現すると表明。東アジアにおける自由貿易はもう時間の問題となった。東アジアの国境なき連帯はいよいよ時間の問題です。食料鎖国、食糧安保、などという言葉はあっても、国際貿易を自粛せよ、国際交流を深化させるなという話は農家からも、消費者からも出ない。こんな矛盾が通る訳がない。

日本農業は健康で安心な食べ物を作るマニアックな農業化と農家間の国際事業連帯による国際棲み分け、国際分業をしていくか。あるいは、農薬・除草剤、遺伝子組み換えも含めて、経済性を追求し商社輸入農産物と対抗していく方法の二者選択の時代に入ったと考えます

私達は、始めた当初は町内のミカン農業を有機農業化することを考えていました。米の一部輸入自由化が決まった時点で、無茶々園の販売事業部門を田舎総合商社化し、活動も西四国一園に広げ、エコロジーに関わるあらゆる物産を取り扱っていくことにしました。

また、ミカンの収入は秋にしか入りません。年中、生活費の足しになる程度の収入があるようにと副農産物栽培も、いろいろ試行錯誤もしています。

もう一つはこの地形で、収入を多くすれば結局、過労になりすぎ、病気になるのがオチということで、少しお金が入らなくても楽しく生きていける価値観の転換も必要と考えました。東京で一日10,000円の生活費が必要なら、無茶々の里では、5,000円で楽しく生きていける社会インフラの整備を行うということです。

小土地制度を超えた大規模有機農業、集団家族経営等新しい農業形態を模索する為、出作り農業も1つの手段として、4年前に片山元治農園を解体し、Fユニオン「天歩塾」を設立して、新規就農者達と野菜畑約10ｈａ、果樹園8ｈａの直営農場を開園し共同大規模出作農業の実験を始めました。初めての野菜作りは4年目に入っても悪戦苦闘が続き、今だ赤字を解消できないでいます。果樹園は甘夏みかんと言う、日本の気候に最も適

した柑橘なため、野菜部門の赤字を何とか経営困難な状態にまで陥らない程度に持ちこたえています。内、3ｈａはレモンを新植しており、来年くらいからなり始めるので楽しみにしているところです。国際化の中で、農産物は確実に安くなる。若い農業者は農業技術だけではダメでであって、グローバル時代にあった新感覚の経営・営農形態が問われています。

技術力・販売力・経営力の三つを兼ね備えた農家はそうざらにはおりません。気の合った同士が集団で家族経営をやる。完全共同なのか部分共同なのか。共同なのか協同なのか。事業連帯なのか共同事業なのか。協同労働なのか雇用労働なのか。子供や老人をどんな形で働き手にするか。集団家族経営は決まった形式は無く、それぞれの家族が助け合って生きる経営方法であり、柔軟性が必要で、今後少しずつ形が整ってくるものと思います。

10年ほど前は、夫婦でミカン畑へ行くということが、当地の農業の見本でした。時代の変化が夫婦で働くという化石のような平和を許さなくなってきました。「父ちゃん研修生とミカン山、母ちゃん皆でムラ作り」母ちゃんのムラ作りは、どこにでもある、交流・加工・販売です。今後はこのような集落的兼業形態も必要かと思います。小土地所有制度を越えた新しい集落協同営農が始まろうとしています。皮肉な事にミカン農業の不安定要因が当地の農業形態の変化を促す一因になっていることも事実です。

私達の企業的農業は、当面県内に限定していますが、近い将来農事組合間提携で、日本全国出作り農業は可能と考えています。5年程前に奈良の法人と名古屋で計画を立てましたが、時期が早く失敗しました。また、近々、国際事業連帯によって国外での出作りもやって生きたいと夢を持っております。現在ベトナムで実験中であります。

2　故郷再生の為の労働力・人材の確保

すでに、無茶々園では、20年以上前から［天歩塾］という研修制度を立ち上げ、既に、10カップル弱の結婚、6～7名の新規就農、6～7名の県外出身専従職員を育てております。その他、引きこもりも10名程度の社会復帰にも貢献しています。また、最近では、フィリッピンの研修生も受け入れ、2004年2月にはベトナムからも数名受け入れることになっています。研修制度は、現在赤字経営ですが、地域再生のために、それなりの価値を持って運営していると思っています。

人材的には、出作り農業、地場産業の仕組み如何で、生き残れるムラとなる可能性は十分整ってきたと判断しています。

3　生甲斐農業

高齢者に野菜畑を登録してもらい、野菜・金柑・花・鶏etc、身体が動く限り健康を兼ねて出来る農業をやってもらうと言うことです。異常気象の当り前の時代に、多品種、大規模の無農薬栽培は今までの経験では限界があります。爺ちゃん婆ちゃんの自給の延長の畑でなら可能ではないかと言う結論に

なり、爺ちゃん婆ちゃんのアサジリ野菜栽培実験をこの春から始めます。

4　生甲斐蜜柑技術指導

現在、無茶々園では70過ぎの年寄りから若者まで、8割以上の農家にパソコンを使ってもらっています。生産工程の管理、出荷計画、販売情報、資材情報等、メールでのやり取りになっています。高齢化が進みミカン山に行けなくなった高齢者も、杖をつきながら事務所に来て、携帯電話とプロジェクターを使って映し出されたミカンの木を見て、選定、病害虫対策等、現場にいる若者達に、直接営農指導が出来るようになるのも時間の問題かと思います。若手農業者と老人のコラボレイトも夢ではありません。

5　規模縮小計画

汗と涙でき築いた段畑とミカンの木。先祖の歴史の重みを噛締めると、中々、荒らすわけには行きません。80歳になっても枯れたミカンの木を切って、新しい苗木を植えています。私達は高齢農家に少しでも長くミカン作りをやってもらう為、重労働な部分を研修生達が引き受けています。高齢化に伴う経営の縮小を身の丈にあわせて実行し、やれなくなった畑の禅譲を計る為です。中には、現農家が70歳になった時、経営を禅譲し、今度は自分が労働者として、年の数ほど仕事をして給与をもらうのだと、我が子の様に、付き合っている農家も出てきました。

6　集落的兼業

今年も300人近い無茶々園に関る都市の生活者が無茶々の里を訪れています。ミカンの花見ツアー、氏神様のお祭りツアーも組んでみました。結構面白いものです。ミカンだけが収入ではない。4年前に植えた2000本の梅ノ木、3000本の金柑も少しずつなり始めました。10ｈａの野菜園では、麦、じゃが芋、さつま芋、里芋、各種菜っ葉などのＢ品がたくさん出来ます。母ちゃん達に、各種食品加工、観光農漁業・ミカンオーナー制・集落結婚式場構想、集落内廃屋のリニュアルで民宿、癒しの宿構想等、可能性が現実のモノになってき始めました。今後、母ちゃん達のコミュニテイービジネスを立ち上げたいと考えています。

多機能漁業

当地は昔から半農半漁の生活地帯でした。昭和30年代後半のミカンブームで陸に上がってしまいました。目の前は太平洋に続く宇和海です。漁業者と共に仕事おこしで働く場所を増やす事も無茶々園の重要な仕事になっています。陸が悪ければ海は蘇らない。海が良くなれば陸も蘇る。無茶々園は漁業者と協力して、石鹸運動、子供環境デー、ホルマリン問題等、宇和海を守る運動にも積極的に参加してきました。今後は運動部分だけでなく事業部分も積極的に関わって生きたいと思っています。

1　真珠センター機能

無茶々園は8年程前から地域の真珠関係者の協力を得て真珠の販売を手がけています。最近は、地元の生産者のオリジナルパールも販売が可能になってきました。真珠の養

殖は海が汚れると難しくなります。陸の汚染のバロメーターなのです。真珠センター機能を持つことで、生産から販売までの一環体制を作りたいと考えています。そして、真珠の貝殻、貝肉等の農業への循環の実験が終わり、実用化に向かって取り組みが始まりました。ベトナムハロン湾のタン真珠との協力も5年目に入り本格的なコラボレイトを目指します。

2　養殖漁業の支援

ふぐの養殖に大量のホルマリンが使われ、町条例を作って使用禁止が決まりました。しかしながら、養殖業も安値で苦しんでいるのが現状です。安心して生活のできる養殖業が出来なければ、禁止をしても、やらざるを得なくなります。家畜はすべて養殖です。鳥も殆ど養殖です。魚だけが自然の砂取りをしています。先進国の生活者は増殖技術が成功したもの以外野生の魚は食べる資格がないのではないかと思います。家畜や鳥同様養殖ものを食べるべきです。そういった視点で魚を見ると、すでに薬漬けの養殖が浮かび上がってきます。農作物同様安心して食べられる養殖漁業の支援が急務となっています。漁業組合と協力して養殖漁業支援も少しずつ始まりました。

3　その他

宇和海は養殖ばかりでなく、いろんな漁業がさかんであります。チリメン漁では、早くから協力関係を持っております。今後は蓄養場の整備による魚屋事業支援、海産物加工事業の構築等、漁業者達とのコラボレイトの関係を進化させ、農産物との連動を高めたいと計画中です。海産物の加工を始めると、捨てるものはすべて、畑の肥料になります。

集落生活インフラの充実

自宅で気持ちよく枯れていける体制、子供は集落の宝として育てる体制。せがれ達や、働き盛りの夫婦が1ヶ月、2ヶ月、1年、2年、故郷に帰らなくても安心して家を任せることの出来る体制。彼らが帰ったとき、無茶々園に関わる消費者が来園した時に十分心やすらぐ仕組みが必要です。

1　集落介護

現在、2級ヘルパーを無茶々園で120人程養成しました。現在、集落介護の実験を進めるべく、空き家を購入して準備にかかっております。パワーリハビリ施設を作って、老人達が助け合って死ぬまで寝たきりにならない工夫、老人達だけでは出来ない部分を若手が助けると言う集落介護、体の動く限り、野菜作り、加工品の下ごしらえ、民工芸品の作成、お墓の清掃業、宴会請負業等など働いてもらい、楽しく生きる工夫を明日は我が身と思って老人達と共に考え実践していきます。その他、集落食堂・弁当宅配・集落タクシー・声かけ運動・痴呆症の老人の受け入れ態勢・農繁期等の介護支援体制など少しずつ充実させようと思っています。一連の活動の中で、年寄りが稼いだ小銭を楽しく使わせる。その使い方が重要なポイントで苦労が入ります。

2　子供の仕事

介護が始まれば、今度は子供の育て方になると思います。まず、老人達と鶏や家畜を育てることを仕事にさせたいと思っています。これらは一度失敗すると再度の挑戦が難しくなるので雰囲気が盛り上がるまで手がけ

るにはもう少し先になると思います。

国際ネットワーク

二酸化炭素の増大、温暖化は日常的に異常気象を引き起して、世界中で農業を中心に人間らしく生きる大きな妨げとなっている。この問題は、地球規模で考えなければ解決の糸口は見えない。(四季の豊かな日本でさえも異常気象でまともな農業が出来なくなっているのに、ヒマラヤや砂漠地帯、極寒地帯の人々はこの異常気象に耐えて生きているのだろうか。食べ物を求めて故郷を捨て流浪の民になっているのでは

化学汚染が遺伝子レベルにまで深刻化し、佐渡島の朱鷺も生きながら絶滅した。果たして人類は化学汚染から遺伝子を守ることが出来るのか。

先進国では使用禁止の化学物質が南の国では規制なく使われている。使用禁止でも製造禁止にしない先進国。許される行為か。

狂牛病がもたらした教訓…安い食べ物を求めたのでは安心は買えない。結局高いものにつく。(既に、安い食べ物の生産は遺伝子操作の領域に入った)→人間の遺伝子は安い食べ物に耐えて子孫を残せるか。自然の摂理はそんなに甘くない。

穀物の80%が輸入ということは外国農産物との関係が食物連鎖としてわが国農業の仕組みに組みこまれてしまっている。(牛・豚・鶏等日本の畜産は、穀物の生産地で育てるか、消費地で育てるかの違いだけである。パンもうどんも殆ど外国産)→農業は国際協調の時代に入った。

地球規模の自給自足が必要。→国際的に農業者達の事業連帯の上に立った輸出入事業を担う、社会的責任を持つ市民ビジネスの事業構築が必要(国際産直は農家とコミュニティビジネスがキーポイント)。

経済封鎖がしかれても、戦争状態になっても食べ物の供給は止められないという仕組み。→人・文化の交流か、経済の深化か、それとも銃か。

生産工程の開示が重要課題になった。→国境を越えたトリサビリテイ(農家間の国際交流による信頼関係の構築なくして外国産の安心安全は存在しない)

都市・田舎・国境,言葉を超え、農家と市民が連合して事業を組み立て、世界の田舎経済が元気になるコミュニテイービジネスが世界の環境を守る

身土不二を原則とした生産者同士の国際間ネットワークこそ21世紀の課題→自国のものを食べるという基本に他国の文化も食べるというスタンスが必要

文明と文化のアンバランスな進化が人類を滅ぼす。(マルクスは宗教はアヘンと言ったが、文明の利器はそれ以上にアヘン性が強い。)

私達は交流・経済のグローバル化が深化する中で日本農業を守れの時代は終わったと思っています。「日本農業を守れ」から「世界の家族農業・地域分化を守れ」と言うことにしました。農家も鎖国をするのではなく世界に目を向けるべきです。

1　研修生受け入れ事業

私達は10年程前に国際88カ国田舎ネットワーク構想計画を立ち上げ、5年前に最初の相手国をベトナムと決め、調査・研究をしてきました。現在候補地の特定をほぼ決め事業計画を立てる段階にきました。一番は言

葉の問題です。2年前からＮＰＯ法人を立ち上げ海外研修生の受入にも取り組み始めました。現在、フィリッピンのベンケット州から第二期性を2名受け入れています。ベトナムからも4名が今回来る予定になっております。この輪を広げ、私達には労動力を、彼等には帰ってムラつくりの協力を互いに助け合って地域で生きてゆきたいと思っています。

2　国際出作り農業

ベトナムのトウモロコシは日本円で20円程度です。アメリカのトウモロコシは15円程度、世界一安いアメリカ農業に価格競争で負けるのなら、アメリカやオーストラリア・ブラジルへ行って我々が作るか、国際コラボレイトをするのか、大手商社や穀物メジャーに頼る必要はないと思います。この思いは次世代の倅達のロマンでしょう。生産現場が見えないトレサビリテイは無意味だと思います。

3　国際間事業提携による輸入・輸出事業

人の交流が進めば次に商流がおきます。また、田舎は農業だけでは生きていけません。各種加工業、流通業、機械器具センター、都市での販売の仕組み、輸出・入事業等、異業種の関連事業のジョイントが必要になってきます。とても、無茶々園グループだけではやりきれない為、私達の考え方に賛同する人達に出資をしてもらい有限会社　メビウスジャパンを設立しました。生姜輸入では失敗もしましたが、いろいろな企業、生協、農家等に少しずつ理解してもらえるようになって来ました。

この原稿は、無茶々園の片山元治さんより協同総研にいただいた「年頭表明」を片山さんにお願いして掲載させていただいたものです。